

頼國文 提出 学位申請論文（課程博士）

『古代詩歌における美の理念―季節と風物を通した詩歌の成立―』 審査要旨

論文の内容の要旨

頼國文提出の本論文「古代日本詩歌における美の理念―季節と風物を通した詩歌の成立―」は、古代日本に定着した中国渡来の植物を通して成立する詩歌の形成と、そこから認められる美的理念について論じるものである。

ここにいう美的理念とは、本論文において季節感を示す季節の風物を取り出し、それが特別な好ましい存在として位置づけられることで、そこに一定の価値が認められ、表現の様式性をはかることで成立してくる理想的な風物・風景により捉えられる詩歌の表現様式であるとする。そうした古代日本（上代・中古）の詩歌

を考える上で、本論は中国と日本の古代詩歌に見られる春と秋の代表的な季節植物である梅と菊を対象として、外来の植物であるそれらを受け入れて古代日本詩歌の中でどのように美的理念の形成を果たしたのかを考えることを目的とするという。

本論文の構成は、「序論」に続いて第一篇では『万葉集』に現れた梅のイメージ』の題のもとに「第一章 『万葉集』の梅とその取り合わせの成立」、第二章 『万葉集』の宴と詩歌の対応」、第三章 『万葉集』巻五における漢文序の問題」を考察し、第二篇では「古代日本詩歌における梅のイメージ」の題のもとに「第一章 「梅花落」における日本と中国」、第二章 平安文学における梅の香と暗香」、第三章 平安文学における紅梅のイメージ」を考察し、第三篇では「古代文学における菊のイメージ」の題のもとに「第一章 『懐風藻』における菊と神仙世界」、第二章 平安朝漢文学における白菊のイメージ」を考察し、最後に「結論」を置く。

「序論」の第一節「万葉集と比較文学」では、『万葉集』と比較文学の研究史の概観を述べる。明治以降に受け入れられた比較文学の中心は、東西文学の比較に中心が置かれていたが、戦後においては日本古代を直接対象とした比較文学論が現れ、その直接的な対象は文字文献による中国文学であった。もちろん、その研究方法は一様ではなく、小島憲之氏にみるような源泉研究があり、中西進氏によるような作品の読みの方法としての比較論がある。特に中西進氏の方法は、文学史の構築ということが前提とされている。そのことから、本論においても戦後の新しい比較文学を基本的に継承し、古代詩歌の上で重要な作家・作品およびその理念を史的に叙述することを目的とすることが述べられている。第二節「本論文の概要」では、本研究の目的、研究課題および意義について述べ、さらに、古代詩歌において形成される、舶来植物を通じた美の理念の考察についての研究方法に触れ、外来の植物が古代日本に受け入れられて、それが文学表現として定着する史的状況の概要を各章に沿って述べられている。

第一篇「『万葉集』に現れた梅のイメージ」の第一章「『万葉集』の梅とその取り合わせの成立」では、日本の最初の歌集である『万葉集』が捉えた「梅花」についての美的理念を論じる。梅は、日本古代を代表する史書文献である『古事記』や『日本書紀』、あるいは風土・物産の書である各国の『風土記』に登場しない植物である。そのことから見れば、既に指摘されているように、梅は外来の新しい植物であり、奈良時代になると、平城京の街路や貴族の庭園に植えられ、梅花を賞美するという習慣が生まれた。そのことから「梅の花」という語が貴族社会においては「歌ことば」として定着するようになる。梅花は多くの木々の花に先駆けて、寒中に咲く早春のシンボルであることから愛でられ、しかも、梅が雪、柳、鶯と取り合わされる重ねの表現を成立させた。このような梅花への関心は、中国古代の『詩経』に梅の実を詠むことから始まるが、梅花そのものを鑑賞するという態度は、漢魏六朝から初唐におよぶ多数の詩文の中から指摘できる。このような梅という素材を通して、『万葉集』と中国文学との文学上の受容・影響関

係を明らかにし、古代日本人の美意識が成立したことを論じている。

第一篇の第二章「『万葉集』の宴と詩歌の対応」では、日本古代の宴のあり方と『万葉集』巻五の「梅花の宴の歌三十二首」との関連を問題として取り上げる。

「梅花の宴の歌」には漢文の序が付されているが、この漢文の序がどのような宴と関係を持つのか、その意義を論じることを目的とする。天平二（七三〇）年正月十二日に行われた「梅花の宴」は、大宰帥である大伴旅人が九州大宰府管轄の役人三十二人を招いて行われた宴会であるが、この大宰府という辺境にあってなぜ「梅花の宴」が開催されたのかに注目する。この宴会は正月の廻り来たこと、懐かしい都が思われることを共有して、三十二人の参加者が心を一つにして歌を詠むことが行われるのであるが、その背後に中国の「梅花落」が存在することが指摘されている。それを研究史の上でたどりながら、これは中国漢詩の影響という問題ではなく、中国楽府詩である「梅花落」の詩を示唆しながら、梅花をテーマとして歌の場が成立したことを意味し、そこには明らかに漢詩と歌との融和が

認められること、さらにまた主催者の大伴旅人の趣向が大きく関わっていることを明らかにしている。

第一篇の第三章「『万葉集』巻五における漢文序の問題」では、『万葉集』が歌の集でありながらも、この作品には漢文の序が付けられていることを問題とする。歌に漢文序をつけている例は巻五と巻十七に集中し、これは大伴旅人を中心とする文学サークルである大宰府歌壇と、大伴家持を中心とする文学サークルである越中歌壇に特徴的に見られることを確認し、このような歌が求める漢文の序とは何か、この問題について考えるのに、大宰府の「梅花の歌」の序文が重要な位置にあることを指摘する。その上で『万葉集』最大の宴席歌である「梅花歌三十二首」には、四六駢儷体の華麗な漢文序を持つことに注目する。四六駢儷体は中国六朝時代に流行した美文であり、古代日本ではこの文体を知識人が好んで用いた。中国の流行から見れば二百年ほど遅れることとなるが、これは漢文の基本を学ぶのに有効な文体であったと思われること、その伝統がこの時代に残っていたもの

と想定する。その梅花の歌序の「詩紀落梅之篇」という句には問題があり、「詩」か「請」か従来から論争が行われていたが、これは序の構成の分析や漢語の文法に基づくならば、ここは「詩」となるべきであることを指摘している。

第二篇「古代日本詩歌における梅のイメージ」の第一章『梅花落』における日本と中国』では、『樂府詩集』や『全唐詩』に見られる梅花詩を特徴づけている「梅花落」の十首と「梅花詩」の十五首を対象として、中国において「梅花落」とはどのような詩であるのかを検討し、続いて「梅花落」の詩が日本古代にどのような受容され、何を描くこととなったのかを論じる。中国の「梅花落」というのは、樂府詩として広く歌われていた歌謡であり、故郷を遠く離れた官人や兵士たちが、梅の花が咲き始めた正月に故郷を懐かしむことを歌う笛の曲である。朱乾は、「梅花落、為春和之候」、軍士感_レ物懷_レ歸、故以為_レ歌」と指摘するように、「梅花落」の歌は正月・故郷・妻などを想起させる歌であったこと、「梅花落」に情詩（恋愛詩）とも思われる内容が含まれている理由は、故郷に待つ妻の立場

からその姿を詠み、彼等自身がそのようにして故郷を思ったからだと指摘する。一方、大宰府の梅花の歌は、大まかにいえば都と鄙との対応の中にあると言ってもよく、梅花の宴歌も都の文化を背景に持ちながら、今ある辺境の地で風雅を尽くそうという、大伴旅人の意図による大宰府官人集団の、謂わば懐かしい京師を思う「望京歌群」であったとする。梅花の宴の漢文序にいう「落梅之篇」とは、まさに中国楽府「梅花落」の漢詩篇に対応する、倭歌篇を意図したものであったという。

第二篇の第二章「平安文学における梅の香と暗香」では、日本最初の歌集である『万葉集』と、最初の漢詩集である『懷風藻』から、平安朝の勅撰漢詩集の『凌雲集』、『文華秀麗集』、『経国集』を経て、最初の勅撰和歌集である『古今和歌集』までの、奈良朝から平安朝に至る漢詩文集と和歌集を対象として、梅の「香」の受容過程と「暗香」の美意識をたどる内容である。ここに「梅」をテーマとするのは、古代日本文学が外来の漢詩を受け入れることで、どのような文学

的達成あるいは詩的美意識を達成したのかを考えるために、極めて適切な素材であるからであるとする。梅はもともと『詩経』に「標有梅」の詩があり、梅の実を詠むことから知られるように、その実が珍重されて輸入されたものであったが、それが花へと関心が移り、さらに色や香りへの関心となり、さらには夜の闇の中で聞く梅の香へと向かう過程は、中国の文学的素材と融和しながら日本文学が形成される問題でもあるとする。梅はそうした日本文学の美的理念生成を考えるのに、最も相応しい材料であることを明らかにして、「梅香」や「暗香」の表現をたどり平安詩歌の形成を明らかにしている。

第二篇の第三章「平安文学における紅梅のイメージ」では、「紅梅」がどのようにに日本文学に受け入れられたかを考察する。白梅は『懷風藻』に見えることから、奈良時代は白梅が梅の花であったが、これに対して紅梅が日本の文献に現れるのは、平安時代に入ってからのことであり、『続日本後紀』承和十五（八四八）年の記事に漸く見えることから、九世紀前後に中国から日本に渡来したと推定さ

れている。平安時代の勅撰漢詩集を見ると、およそ平安初期の桓武朝にはすでに紅梅が現れていることが知られ、この章では平安時代の勅撰漢詩集と勅撰和歌集を中心に、紅梅の受容過程と紅白の美意識をたどり、その美的理念の形成について論じる。『経国集』巻十一の作品によると、東宮平城の御殿の前庭には、既に紅と白の梅が植えてあったことから、紅梅の賞美の濫觴は平城皇太子の詩宴から始まったと思われることを指摘する。また平安朝の漢詩に対して、和歌作品の上では『古今集』までに詠まれたものはすべて白梅と考えられている。紅梅を詠み込んだものは、勅撰集では『後撰集』が最初であることから、平安漢詩と比べると百年ぐらいの差が見えることを確認し、紅梅は先ず漢詩集に吸収され、和歌へと展開を示したのであった。その段階では自邸の庭などに紅梅を植えて、それを愛でることが流行したのだと指摘する。

第三篇「古代文学における菊のイメージ」の第一章『懐風藻』における菊と「神仙世界」では、『古今圖書集成』に収録された中国六朝期の十三首の賦、或い

は書、賛、銘、頌、帖などに関する菊を取り上げ、そこに見える「菊花」のイメージを考察対象とする。それらには「不老」「長寿」ということが詠まれることを確認する。そのことを踏まえて古代日本の『懐風藻』に詠まれた菊に関する詩句を確認し、殊に長屋王別邸における菊を詠む詩を考察し、なぜここに菊が詠まれたのかを明らかにする。『懐風藻』の中では、舶来の植物の菊は、秋の代表的な風物として、風雅の宴の場で菊酒の杯を傾けたり、あるいは新羅の使者を送る饗宴の詩に菊が詠まれていて、それらには中国文献に見える「不老」や「長寿」のイメージがすでに内包されていることを指摘する。奈良朝の貴族たちは、立派な庭園を造ることに競って力を注いでいて、長屋王家の佐保の別荘、即ち作宝楼はことのほか勝れたものであったされるが、そのような庭園を背景として詩が詠まれるのであるが、それは同時に詩の情景として重要な背景であったこと、作宝楼は詩宴を開くために設けられた、先進的な文化施設であったことを踏まえ、この作宝楼における詩宴に菊が詠まれたのは、重陽という季節を意識しながら、詩

宴の場に舶来の植物を提示することで秋という季節を彩ったのだとする。

第三篇の第二章「平安朝漢文学における白菊のイメージ」では、白菊の美的理念の形成について考える論である。白菊が日本の文献に現れるのは、平安時代に入ってからのことである。『経国集』の嵯峨上皇時代の天長三（八二六）年に詠まれた「重陽節菊花賦」から白菊が現れ、それが急速に漢詩・和歌に広がることを確認する。もっぱら黄色の菊を賞美した中国の漢詩の中に、白菊の賞美とそのイメージを絞りながら、平安朝の漢詩文における白菊の受容とその美意識を明らかにする。白菊は平安朝前期に輸入されてから、その白さを称える漢詩・和歌が詠まれ、白菊への好尚が広まった。同じく菊の花を詠んでも、唐詩ではその花に託して「徳性」を詠むことを特徴とするのであるが、しかし、平安朝漢詩文では漢籍のイメージを受けながらも、むしろ白菊と霜とを重ねるなどの情趣を中心とするのであり、これは日本文学が新たな展開を示している問題であるとする。

以上のように、本論文は中国から渡来した梅や菊の花の受け入れと、その素材

を詩歌に詠むことで、日本古代詩歌における梅と菊に関する美的理念の形成が説かれていた。梅も菊も中国の古代漢詩から出発して唐宋に至り詠まれるが、それが日本古代の詩歌に受け入れられ、日本の風土性や日本人の精神文化と融合することによって、日本人による日本の美意識として、季節の発見と様式性の確立、季節毎の風物選択という新たな文学を形成したことを確認し、そこに古代詩歌の美的理念が成立したのであるとする。

論文審査の結果の要旨

頼國文提出の学位申請論文である『古代詩歌における美の理念―季節と風物を通した詩歌の成立―』は、古代日本（本論では上代・平安初期）の詩歌に見られる美の理念形成を季節観の問題から論じたものである。古代詩歌における美の理念形成については論じられることが多いが、当該論文の特徴は、第一に古代詩歌

の中から中国渡来の植物である「梅」や「菊」の花を通して、それらの受け入れと文学表現としての形成、およびそれらが形成した表現様式を追求するところにある。第二に研究の方法として中国古典詩（詩経から唐詩まで）との比較研究にあり、中国古典詩における季節観形成の歴史を把握しながら、古代日本詩歌の形成を論じているところにある。

日本人が季節観を文学表現に取り込んだのは、およそ近江朝時代であり、それが定着するのは奈良時代の前期である。以後に平安初期の漢文学隆盛の時代を迎え、漢詩および和歌が奈良朝に定着した季節観を、より多様に、またより繊細に表現することとなり、一つの完成を迎えることとなる。本論文では、このような表現の歴史を確認することの中から、具体的な季節の景物の分析を行い、そこに様式化される季節表現の美的理念（あるべき風物）を求めている。以下、特筆すべきことを取り上げて報告としたい。

ここに取り上げられる季節の景物の一つは、外来植物である「梅」についてで

ある。この梅の花をめぐる考察として、一に万葉集の中に取り入れられた梅の花とそれに組み合わされた景物表現の成立について、一に梅花への観賞が梅花の宴という集団的詠作の中に行われ、そこには共有された梅花のテーマ性が存在することについて、一に梅花の宴の作品群に付された漢文序の意義について、一に楽府詩の梅花落と古代日本詩歌との関係について、一に平安時代に初めて表現されることとなる紅梅の受け入れと詩歌における表現の特質についてである。

この梅花をめぐる本論文の大きな成果は、第二編第一章に見られるように、上代の漢詩と上代の和歌において梅花の受け入れが大きく異なることへの指摘にある。梅花を詠むのは七世紀後半の漢詩に始まるのであるが、それらの多くは宮廷詩において禁園を賞賛する方法として詠まれるのである。しかし、八世紀初頭の天平二年正月に開催された、大宰帥大伴旅人主催の梅花の宴の歌は、大宰府という辺境において開かれた歌宴であることに注目し、先行説を踏まえながら、この辺境性と梅花との関係を求めることにより、この時の梅花には「梅花落」という

楽府詩のテーマが隠されていること、それ故に漢文序に示された「詩紀落梅篇」とあるのは楽府の梅花落であることを確認する。楽府の梅花落は、故郷を離れた役人や兵士たちが正月の訪れた時に歌うのだとされる。そのことを踏まえると大宰府において開催された梅花の宴に歌われた歌は、懐かしい故郷を思う歌であったのであり、その受け入れは模倣や影響にあるのではなく、むしろそこには梅花落のテーマを理解している歌人たちによる望郷の歌として捉えることが出来るという結論を導く。従来の比較研究においては、影響関係とともにその模倣が説かれることが多いが、本論文が示したテーマの共有という指摘は、日中比較研究において重要な意味を持つものと思われる。

さらに、もう一つの季節の景物は、同じく渡来の植物である〈菊〉についてである。菊の花をめぐる考察として、日本最初の漢詩集である懐風藻の漢詩を取り上げ、そこに受け入れられた菊の花の特質について論じる。次いで懐風藻漢詩が受け入れた黄菊に対して、平安時代の詩歌に流行する白菊への関心と、そこにあ

られる平安時代初期の詩人や歌人たちの美意識についてである。

菊の花は万葉集に登場しない。菊は上代漢詩に初めて見える植物であり、それだけに外来の植物の中でも新しい渡来であることが知られる。梅が漢詩から和歌へと流れを取ることから見ると、外来植物はまず漢詩に受け入れられて和歌へと展開することが知られる。菊も懐風藻に受け入れられ、続いて平安漢詩文に定着し、古今和歌集へと流れることとなる。本論文では、こうした外来植物の着の流れを確認しながら、第三編第一章で菊の花がまず受け入れられた懐風藻の漢詩を分析する。特に菊の花は八世紀初頭の左大臣長屋王の邸宅で開催された詩宴に多く詠まれた。そこでの菊の特徴は神仙的世界と菊酒を飲むことにあり、神仙的世界を詠むのは長屋王の興味からであり、菊酒を飲むのは九月九日の節句を意図しているからだとする。古代日本の重陽の宴は天武天皇の忌日にあたり、当日の宴会が出来なかったが、中国の詩人たちが重陽の節に詩を詠むという習慣があり、それに倣うことで長屋王邸の菊の詩が上代に展開し得たことが指摘されて

いる。第二章では、この重陽の宴が平安時代に解禁となり、漢詩に菊の詩が多く詠まれることとなる。本論文では、菊の花が黄菊から白菊に移ることに注目する。このような菊への好尚の変化を全唐詩の分析を通して確認し、嵯峨上皇や島田忠臣らの白菊の形成が霜や雪との取り合わせにあったことを明らかにする。そのような白菊の表現が和歌に「初霜と白菊」といった表現を可能にしたのだとする。

以上のように、本論文は古代日本に渡来した外来植物の春の梅と秋の菊とを対象として、そこに形成された詩歌の特徴を明らかにし、それらが歴史的な段階を踏みながら表現の様式性を生みだしたこと、ひいてはそれらが季節の好ましい風物という意義を与えられることで、詩歌における美の理念を完成させたという結論を導いている。日・中にわたる古代詩歌を博搜し、しっかりした典拠を示していること、その分析も的確に行われて穏当な結論を導いていることが認められる。本論文にそうした成果が認められるとともに、本論文の「美の理念」という概念は重要なキーワードであるだけに、表現の様式性の問題にさらに踏み込んだ上で

の論理性を提起する必要性が認められ、今後の課題になるであろう。しかし、本論文を通してさらなる展開の可能性があり、本論文の提出者である頼國文は、博士（文学）の学位を授与せられる資格があるものと認められる。

平成二十四年二月十六日

主査 國學院大學教授

辰 巳 正 明 ①

副査 國學院大學大学院客員教授

近 藤 信 義 ①

副査 東京学芸大学教授

河 添 房 江 ①